よ せ る 思 い

～灯し火であった者たちへ～

２年Ｅ組 担任 吉成　正士

私が教員になって今年で７年目。この板野中学校に赴任してきてからは４年目である。恥ずかしながら私が同和教育というものにめぐり会ったのは教員になってからである。それまでにも部落差別との出会いはあった。高校時代部落差別に直面し，親の前ではその差別的な発言に抵抗はした。しかしながら部落の友だちのいないところでたまに部落の話が出たときは，周りの友だちに調子を合わせるためにワイドショーや週刊誌の噂話でもするかのように，部落の偏見に満ちた話題を出し，おもしろおかしく遊んでいた。どうしてそんな二面性を持った自分であったのか？両面とも本当の自分であると，今は感じている。しかし，その両面とも真実であるとは，当時も思ってはいなかっただろう。やはり，友だちには正しいことを貫けなかった弱さが自分にはあった。その逆に，親には正義を貫こうとした自分があった。しかしそれも貫ききれはしなかった。なぜなら，貫ききるための説得となる，部落の起こりも知らなければ歴史も知らないし，ましてや不合理な部落差別に苦しんできた人たちの思いも，知るよしはなかったからだ。だから教員になってからも，研修会の度に言われていた「教師自身の同和教育観」というもの自体，何のことやら，何をどう考えていいのやらわからない日々が続いた。当時の私には「こういう問題は，教師だから，教師になったから，この学校に来たから，勉強しなければいけないんだ。」としか感じられていなかった。しかし今では「私の中学時代の先生や高校時代の先生は，どうしてこの問題についてキチッと教えてくれなかったんだ。」という憤りでいっぱいである。今から１５年くらい前であるから，当然なされていなければならないことである。大学に対してもその思いは同じである。「少なくとも教育者を志そうとしている者に対し，教科教育ばかりで，どうしてこんな重大な問題についても徹底的に教えてくれなかったんだ。」と，責任転嫁的に今でも思う。そんな私であったから，教員になりたての頃は同和問題学習の時間が嫌で嫌でたまらなかった。ネタさえあれば，その時間はテストにしたり，学級の時間にしたり，球技の時間に当てていた。さもみんなで，暗黙の了解であるかのごとく目線を合わしていたのを今でも覚えている。そういった学校教育の現場で，どうやって部落の生徒たちが顔を上げ，胸を張って生活していけようか。こういった「尻込み」の意識こそが部落差別を温存させ，部落解放を遅らせてきたように思う。そして私もその一人である。しかしそんな時ばかりではなく，一生懸命に取り組んだこともあった。研究授業もした。しかし，生徒の発表の中に生きた，輝く，明日の部落解放を唱った力強いものはなかった。それもそのはず，やはりまだ自分の問題として捉えられていなかったし「自分を語る」ことをしていなかったのだから‥‥。

そんな中でも自分なりに頑張ったという自負を抱いたまま板野中学校へと赴任してきた。当時，板野中学校が全体学習を始めて２年目にあたる年であった。全校生徒が入っての全体学習は，この年からスタートしたと覚えている。その中で，私は痛烈なショックを受けた。

「一体この異様ともいえる雰囲気は何なんだ？こんなにもしっかりとした発表が何故できるのか？」

そういう困惑した状況で，とりあえず，今までのやり方を続けていった。全体学習でやろうとしていることの意を汲みながら‥‥。そして本校に赴任して２年目の年，私は３年の担任となり，自分自身革命的とも言える年を迎えることとなった。

※

当時のクラスには，個性も強かったが純粋な心を持った生徒が多く，私自身が生徒の純粋な心

の揺れ動きによって変えられてきたと，今さらながら思う。そんな中で，私は実に多くの自分をさらけ出すことができた。部落差別との出会いに始まり，人にいじめられたことも，人をいじめてきたことも，その場しのぎの同和問題学習をしてきたことも，中学生を冷めた目で見ていたことも，暴力で中学生を押さえつけていたことも，そして家族内の差別的事象も‥‥。そういうことを少しずつ明らかにしていくことで，本当の人間としての生き方に気づいていけたように感じる。その中でもとりわけ，１学期の全体学習の時にされたＩ子の涙ながらの部落民宣言には強い衝撃を受けた。そしてどんな状況においても，繰り返し繰り返し発表し頑張る姿を見て

「私はＩ子に対してこのままでいいのだろうか？

私はＩ子の発表に応えていけるだけのことをしているのだろうか？」

と，疑問を抱くようになっていった。そしてまた私は

「我々がしてきた同和教育は，学校という枠の中でのみの取り組みでなかったか？」

と感じるようになっていった。しかしそれでは今までの取り組みと同じである。実際はそうでなく，自分の生活場面の全てでこの話題が考えられ，語られねばならないのではないのか。また全ての人々がそうでなければ，本当に社会は変わらないのではないか。そんな思いを抱き，悶々とした日々を過ごしていたある日の夜，昔からの友人が私の部屋を訪ねてきた。ひょんなことから部落問題の会話へと発展してきた。当然今までに部落問題について話し合ったことはなかったが「こういう時にこそ話をせねば！」と思い，明け方まで酒を飲みながら激論を交わした。それでも理解してくれたようには感じられなかった。それが私には悔しくて悔しくてたまらなかった。そんな悔しい思いを抱いたまま，次の朝登校した。そんな悔しい思いは，我がクラスに入っても冷めず，いつのまにかそこで私は，当時のクラス全員に自分の奥底に秘めていた事をさらけ出していった。それこそ涙をボロボロこぼしながら吐いた。次にあげるのは，あくる日のＩ子の記録ノートである。

※

『今日，先生がいろんな話しをしてくれた。話しを聞いているうちに涙が出て止まらなかった。不安な気持ちがある。なのに先生があんなことを話してくれた。何らかの理由があると思う。苦しんだと思う。それを笑ったりする権利なんて誰にもないし，苦しんで，悩んで，泣いたりする人を笑ったりする人なんて私は絶対許さない。他人のことをどうこう言う権利なんて誰にもない。「他人の痛み」なんて分からない。苦しみの深さ，思いなんてはかれないから。私は先生の話しを聞いて，そのことを何故いったのだろうと思いました。でも「他人の痛み」を知ることで，自分も強くなるんだろうなぁ。過去は誰にも変えられないし，どんなに頑張っても時間は戻らない。だけどこれからの未来は，先生自身が変えられる。こんな事書いたら怒られるかもしれないけど，私は先生が未来を変える姿をみたいなぁと思いました。でも，私には先生の痛み（苦しみ）なんてきっと分からないんだろうな。分からない自分に腹がたつ。悔しい。泣いてばかりの自分に嫌気がさす。これからは，自分の苦しかった話しとか，友だちに話していこうと思います。生意気な事ばかり言ってすみません。しかも昨晩，一睡もできませんでした。』

※

この時に，私は初めてＩ子の気持ちが分かったような気がした。自分自身の本音（喉の奥でつっかえてしまい，どうしても言えないような苦しい苦しいこと）をぶちまけるということを‥‥。

一体自分の本音とは何であるか？教師は，生徒にどうしても本当の思いを言わせようとしているように思う。それに応えて発表してくれる生徒もいる。しかし，本音を言うときの苦しさやつらさ，恐怖心を教師側がどれだけ分かっているのだろうか。教師が本当の思いや本音を語らずしてどうして生徒に寄り添うことができようか。本当の今の自分の思いを言うということは，実に

苦しいものである。体は硬直し，手には汗をかき，いったん言おうと思っていても，やっぱり喉元でつっかえてしまう。言った後もすっきりしたようですっきりせず，これを言ったことで周りのみんなはどう思っているのだろうかと，神経をとがらせて，しかし平静を装って生活をする。そんな思いを一体教師はどこまで分かっているのだろうか。私自身にとって，この時間がそうであった。しかし，私には生徒たちがいた。当時の３Ｅというクラスの仲間がいた。様々な学級の取り組みの中で，常に同和教育を中心に据え，共に考えてくれた生徒たちがいた。私は生徒たちにより支えられ，人としての生き方を再確認できたように思う。そして，本当におかしいことがおかしいと言える勇気や，真実を貫いていく力強い生き方を，私は生徒たちから学んだ。そんな思いの全てを，当時３Ｅだった生徒が卒業式の答辞として代弁してくれた。日頃から明るく，どんなことがあっても常にクラスを引っ張り続けてきた生徒である。卒業式の前日も明るく答辞を読む練習をしていた生徒である。しかし卒業式だけは違っていた。全体学習を含めためくるめく想いが，彼女の頬を涙で濡らしていった。その叫びともいえる答辞と，聞いていた会場の生徒からの嗚咽は，卒業式自体を全体学習にしてしまったかのようであった。私自身臨席していながら，体も顔も熱くなり，涙とも鼻水ともわからぬものを流しながら「まだまだこれから。頑張るぞ。頑張るぞ。」と震える拳を握りしめていた。そんな答辞を，私は今でも忘れることができない。

※

『答辞　今静かに目を閉じますと，過ぎ去った三カ年の様々な思い出が浮かんでまいります。何もかもが新鮮で期待と不安に胸膨らませながら臨んだ入学式。クラス一つになり，友情の和をより広げた体育祭や文化祭。また，二年生の修学旅行は自然の雄大さに感動し，戦争の悲惨さに触れ，平和への願いを強くした貴重な体験でした。真夏の太陽の下で，雪の舞う寒さの中で友と励まし合い，厳しい練習に耐えた部活動。自分との闘いだった受験勉強。そして，学年，学校全体で取り組んだ同和問題学習。私たちはこの全体学習で涙を流しながら自らの思いを語る友と，差別の怒りに震えた友と共感し合い，支え合い，仲間の絆を深め合うことができました。「本音を語る」たったそれだけのことがどれほど苦しいことなのか。私たちはこの学校で，この体育館で初めて知りました。同和問題学習に取り組んでいた時の私たちは「輝いていた」と自信をもって言うことができます。私たち卒業生は，この差別と闘おうとする炎を，身体を熱くする炎を今，在校生の皆様に託します。』

（以上の取り組みは一昨年度の「1992年度 峠を越えて」に記載）

※

一昨年度の取り組みを受けて昨年度も３年の担任となり，３４名の生徒たちと春を迎えた。そしてその中で，多くの差別意識の中で私たちは生かされているということを共に知った。被差別部落に対する悪く暗いイメージ。町自体に対する悪いイメージ。子守唄のように小さい頃から周囲に植えつけられてきた様々な差別意識。経済的に豊かでなかったり，母子家庭や父子家庭のように他の家庭と違うことが卑しいかのように感じさせられてきた意識。学校で部落の子がうつ向くことしかできなかったり，部落外の子が自分の事として捉えられないような教師の取り組み。結婚の時に表面に浮かび上がる家どうしのつりあい。そんなものが，みんなで本音を語っていく中で浮き彫りにされてきた。そういった社会の不合理性に目を向け，そのことに対して自分はどう考え，どうしていかねばならないのかを考えることができたように思う。次に挙げる記録ノートは，ある日の生徒による家庭内での取り組みである。

※

『今日家の人に「部落についてどう思う？」って聞きました。父は見ていたテレビに集中していたのか，わざとか分からないけど，何も言いませんでした。それで，話し合いとまではいかない

けど，意見を聞くという感じでした。母は「お母さんはＴ市からこの家に嫁に来たんだけど，やっぱりむこうにも同和っていわれてる所があったなぁ。結婚とかいろいろ難しいんだってねえ。だけど，６０才以上ぐらいの人は昔嫌ってたみたいだけど，今の若い人は気にしてないんじゃない？」と言いました。祖母は今７０才を過ぎているんだけど「大阪の方では部落とかそんなこと言う人いなかった。」と言いました。母は「都会より田舎の方が，そういう事はうるさいんじゃない？」と言いました。それでお母さんは「部落の人とか関係なしに，人間はみんな平等だって言ってるのに，何かの税金がいらなかったり，安かったりするのは矛盾してる。それが何か気にいらない。」と言っていました。私が部屋からいなくなって部屋の外にいるとき聞いてしまったんだけど「部落の人と結婚するって言ったら，やっぱり気にするわねえ。だけど，恋愛だったらしょうがないか。」と言っているのが聞こえてきました。私は後で，祖母の言った「今はもうみんな平等になってるよ。」という言葉から，「自分以下を求める心」の最後に出てきた「差別はなくなりましたと言わせる社会に差別がある」という文章を思い出しました。今までこの文章の意味がよくつかめなかったけど，何となくこういう事なのかと思いました。今日のは情けないけど，話し合いじゃなくて，聞くだけでした。今度の機会には，ちゃんと１対１で話し合ってみようと思います。』

※

こういう意識の積み重ねこそが，部落を忌み嫌い，悪く暗いイメージとして植えつけていくのではないかと思う。それがひいては我が町に誇りをもてなかったり，我が仲間につながっていけなかったりしているのではないだろうか。しかしそういう意識の中で，実はみんなが互いを苦しめ，またそのことが逆に自分自身を苦しめているということに気付かねばならないと思う。そんなものから解放されるならば，そこにはなんと素晴らしい社会ができていくだろうか。どんなに解放的な社会ができていくだろうか。だから，今のうちから真剣に取り組み，頭を練っていくことが大切なのであると思う。頭の軟らかいうちに，真実を見つめていく習慣を，鋭く見つめる眼を，養っていく必要があると思う。

※

またこの年度，このクラスで私自身１番の勉強になったのが，３年生という受験生に絡んでの，進路公開の授業であった。それまでにも，同和問題学習に真剣に取り組めるのなら，学力は向上するということを言ってはきた。なぜなら，同和問題学習というものが，自分を素直にする学習であるからである。素直になるということは，自分自身が反省できるということであり，真摯な態度になるということである。そしてこの学習は，自分以下を求めない生き方をしていく学習でもあり，常に自分自身を向上させていく学習であると思う。本当にこの学習の意味が理解でき身についているならば，生きる目標をもつことができるだろうし，今自分が何をせねばならないのかが分かってくると思う。そういった目標や，人間として生きていく確かなものを見つけようとする意志があるのだから，当然学力も向上すると考える。しかしこの時期，やはり進路のこととなると，言葉がつまっていく。元々言いにくいであろうことは承知の上で設定した時間である。しかしそこからまた膿が出てくる。それぞれの進路が徐々に決まっていくこの時期。よほどのことがない限りは，互いの進路希望なんか知ろうはずがない。つまりこの時期に進路先のことなんかは，タブーなのである。そこをあえてついた。考えてみれば，一人ひとりの仲間の進路について正面きっては聞けず，陰でコソコソと憶測が流れていく。この流れは，部落差別が温存してきた流れとよく似ている。しかし自分の夢と重ね合わせて発表していくことで，自分が何のために進学しようとしているのかを再確認できただろうし，しっかりとした自覚や意識をもってこれからの日々を頑張っていけるようになったように思う。また素晴らしかったのは，仲間の夢や希望

を聞いて，自分も頑張らねばという相乗効果が起きたということである。このことは，互いを認めているということであり，尊重しようという姿勢であるように思えた。そんな中で，せめて私たち教師にできることは，本当の進路指導をしていくことだと思う。私自身，進路指導とはとにかく学力をつけ，より良い高校に（教師にとって）進めることのように教わってきたし，また自分もそうしてきたように思う。私に進路指導をされてきた生徒の中には，しんどい思いをしながら高校へ通学している者もあるかもしれない。申し訳ないことをした。だから私は，今の子たちにしっかりとした目標や自覚をもって，堂々と胸を張り通学できるような心の力をつけてやりたいと思った。

次の文章は，自分の進路希望に胸を張れなかった子の記録ノートである。１週間の時を隔てて，だんだんと顔を上げ，胸を張れるようになってきた。自分の中にある偏見や差別意識に気づき，またそれが周りから植えつけられてきたものであって，そういうものに心が支配されてしまうことで，誰でもない自分自身が豊かな生き方をしていけないんだということが分かってきたのである。しかしそこまでの考えにたどり着けたのは，多くの仲間の支えがあったからだと思う。その子自身一つの大きな壁を乗り越えられたのである。自分の進路がはっきりしてしまうと，どうしても時間を持て余してしまうものだが，逆にその子は，いきいきと自覚をもって生活ができるようになったのである。

※

『１７日の日，初めて進路の話をし，一人ひとりが語っていきました。Ｓ校を受けるのは，自分の夢に近づきたいってこともあります。でも，なんとなくみんなの前で言う気にはなれなかったけど，いつかはわかることだし，言ってみるだけ言いました。なんか言わなかったら気持ちがすっきりしないし，言ったけど気が重い感じでした。そんな重い気持ちをしているのは，この世間・社会みんなが作ったんだなって思いました。親からっていうのもあるし，親戚の兄ちゃん姉ちゃんていうのもあるかもしれません。でも，日・月曜日で気持ちが重かったのが消えた気がします。それは，今日またみんなの前で言えて，先生の言葉やみんなの言葉が聞けたからです。Ｓ校は悪いところって決めつけるのが悪いということが分かりました。自分にもそんな面しかなかったからです。みんなだって「自分の決めた道で，希望をもっているのならいい。がんばろう。」って言ってくれました。嫌な気持ちをした面もあったけど「Ｆ組でいてよかった」って思いました。友だちってすごくいいと思いました。授業が終わった後，友だちからいろいろな言葉をもらい，すごく嬉しかったです。Ｓ校のことでこだわってきたことが嘘のようです。でも今は信じ合える友だちだから，助けてくれ，助けてあげることができます。卒業すると，Ｆ組もみんなバラバラになります。信じられる友もいなくなるし，周りの目を気にすると思います。でも，そんなのに負けないように，自分の夢を崩さないように頑張りたいです。自分の弱さや愚かさ，そして周りの目になんかに絶対負けない。友だちが発表してくれて嬉しかった。でも一番嬉しかったのは，ONさんが言ってくれたこと，OMさんが言ってくれたことが，本当に嬉しかったです。他の子の言葉も，嬉しかった‥‥。どこの高校行くにしても，みんなプレッシャーや偏見や親を気にしながら，勉強していると思います。でも，それに負けないで頑張り続けるっていうのが，私たちの目標だと思います。つらいのは自分だけでないと思ったら，どんな苦しいことでも乗り越えられる気がしました。』

※

３学期に入り進路公開授業をする中で，１度は失いかけていた熱い思いがよみがえってきた。それは当然のごとく，本当に苦しい思いをしている中で，その時の本心を語ったからだと思う。どちらかと言えば，この時期の受験生には道徳も学活もなく，ただひたすら受験勉強に励むかの

ような面があるが，この子たちは最後の輝きを求めるかのように，最後まで語り合い，つながっていこうとした。そして事実つながっていった。私自身，この授業がこれほどまでに多くのものを与えてくれるとは思ってもみなかった。私が何を言うまでもなく，休み時間は教え合い学習をし，進路の決まった者は自覚をもって自分にできることをしていた。同和問題学習をしていく中で，一番楽な思いをしたのは実は私だったのかもしれないと思ったりした。そして卒業。この町を，この中学校を本当に胸張って語っていける一人ひとりであってほしいと，心から願った。そんな時，卒業してから予期せぬ事が起こった。学級のＫ子が新聞社に投稿した文章が掲載されたのである。このことは，私自身の教育観に大きな衝撃を与えたし，これからの教育の方向性を示唆してくれたようにも思う。

※

『～志望校に合格・夢実現へ努力～３月１８日，私は無事志望校に合格しました。合格するまでの道のりは厳しく，とても苦しかったです。それは高校入試を簡単に考えていたからでした。今の成績で志望校は難しいと分かり，必死で勉強したけど成績は思うように上がらず，途中で志望校をあきらめてほかの高校に変更しました。入学願書提出１週間前に担任の先生から「前の志望校を受験してみては」と言われ，２日間悩み続けました。やはり当初の志望校に行きたいという気持ちが90％あり，石にかじりついても絶対合格をと思い，今まで以上に勉強し毎日が本当に苦しいものでした。その苦しみを乗り越えて頑張ることができたのは，高校に合格して同和教育をやりたかったからです。担任の先生もそのことを知っていたので勧めてくれたのだと思います。合格した今，先生の期待に応えられるように先輩，友だちと一緒に，苦しいことやつらいことも中学時代にみんなで取り組んだ授業を思い出し，高校でも自分の思いを語って，同和問題の解決に向かって頑張ります。私の闘いがこれからスタートします。後戻りすることなく少しでも前進することを望んで，４月から待望の高校で１歩ずつ達成していきたい。そして「昨日の自分より今日の自分が好き」になれるように頑張っていこうと思います。』

１９９４年３月３１日徳島新聞「読者の手紙」掲載

（以上の取り組みは昨年度の「1993年度 峠を越えて」に記載）

※

私が本当の意味で同和教育に取り組みだして，たかだか３年目である。それ以前にもやるにはやっていたが，今になってみれば「やっていた」とはとてもでないが言えない。しかしそのことは，多かれ少なかれ毎年感じるようになってきた。毎年新しい発見をするのである。それもそのはず，毎年クラスの生徒が違うのだから‥‥。その中で逆に教えられることの方が多いため，どうしても「新しい発見」をすることになるのだろう。子どもたちは素晴らしい。それぞれの視点で私に問いかけをしてくる。時には生徒たちの正義が勝り，やり込められることもある。それもまた素晴らしい。以前私が生徒たちを子どもとして見ていた頃も同じ思いを抱いていただろうか。力で押さえつけていた頃はどうだっただろうか。そんなことを考えると，教師が受け持つ１年間というものは命がけの勝負のようなものだとつくづく感じる。もっと厳しくみると，１日１日，とりわけ１学期の始業式。これほど重要な１日はない。そんなことを教えてくれたのも，まさに生徒たちである。様々な思いを私の宝箱に残して巣立って行った生徒たち。その全てを，今の目の前にいる生徒たちに手渡していきたい。そしてその上に，私の全てをさらけ出し，ぶつけていきたい。人の世に熱あることを信じて‥‥。

※

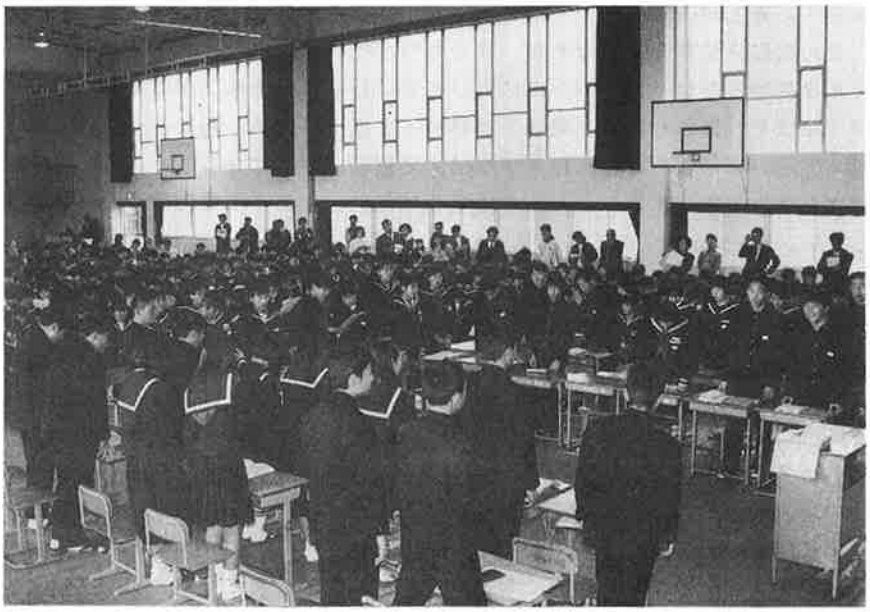
最後に，この夏我が２Ｅのクラスのベランダには，たくさんの朝顔が，毎朝所せましと連なりながら可憐な花を咲かせた。もとはと言えば，今は高校二年生の子が当時のクラスに持ってきた

プランターに，今は高校一年生の子が蒔いていった朝顔の種が，計らずとも芽を開かせたことが発端となり，学活の時間に全員で朝顔を植えようということになっていったのだ。不思議なものである。何世代にもわたり，生徒たちの思いは受け継がれ，励まし，私を奮い立たせてくれる。

「先生，何しよん，頑張らなあかんでぇ。」

そんな声が，プランターを見ていて，朝顔の花を見ていて，聞こえるような気がしていた。

全　体　学　習　の　受　付



「サ　ラ　イ」　合　唱